九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「願立」説話展開の再検討

橋口，晋作
鹿児島県立短期大学教授

https://doi.org/10.15017/9421

出版情報：語文研究. 80, pp.23-34, 1995-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「願立」説話展開の再検討

橋口晋作

「平家物語」巻一に収められている「願立」説話は、昭和五十年から六十年にかけて「平家物語」研究者の注目するところとなり、その性格、構造や展開に関する論文が次つぎと発表された。その主要なものを挙げれば、渥美かをる「延慶本平家物語に見る山王神道の押し出し」(注一)、山下宏明「『平家物語』挿入説話の説話論的考察――「願立」説話をめぐって――」(注二)、渡辺晴美「平家物語巻一『願立』説話の構造について」(注三)、武久堅「『願立』説話の展開――延慶本平家物語と『日吉山王利生記』――」(注四)、早川厚一・佐伯真一・生形貴重「四部合戦状本平家物語評釈(二)」(注五)といったものになろうか。これらの論考によって、「願立」説話の性格、構造や展開についての基本的な考え方が打ち立てられ、現在に至っているのであるが、その描写の仕方や信仰を分析をしてみると、その構造、展開などに再検討の必要があると思われる。そこで、左に筆者の考えたところを記し、諸氏の御意見を待つことにしたい。

一

「願立」説話の展開を辿る時、最初に、『愚管抄』や『天台座主記』がこの説話をどう取り組んでいるかを見て置く必要があるのではないかと思う。

『愚管抄』の中で日吉社又は山王が出て来るのは、筆者の調べたところでは、ここと良真座主の祈りによって堀河天皇が誕生したところの二箇所に過ぎない。とすれば、この説話の基になった事件は、慈円(をはじめとする比叡山中枢の人)に、日吉社又は山王が日本の歴史に関わった二つの重要な出来事の一つとして認められていたと見られる。『愚管抄』の右のような扱いから、この事件は、比叡山関係者を中心に日吉社、山王に関するものでは最も有名な事件となっていたと考えて、誤りあるまい。

さて、『愚管抄』は、この事件を、

ホリカハノ院ノ御時　山ノ大衆ウタヘシテ日吉ノ御コシヲフリクダシタリケル　返〳〵キクハイナリトテ　後二條殿サタシテ

射チラシテ神輿ニヤタチナドシテアリケリ　友實トイフ禰宜キズヲカフムリナンドシタリケレバ　ソノタヽリニテ後二條殿ハトクウセラレニケリ　仁源理智房ノザストイフハ兄弟ナリ　ヲホミネナドトホリテ　世ニシルシアルモノナレバ　イノラレケルニ　イデ〳〵　ヤメ　ミセン　トテ　ヨリマシガフトコロヨリクロ血ヲフタ〳〵トトリイダシタリケレバ　アラタナルコトニテ　ヲソレヲナシテノチハ　理智房ノザスモイノラレズナリテ　ツイニウセ給ニケルトゾ申ツタヘタル

と記している。禰宜が傷付けられたことを重視した内容だが、その前半部では、御輿振り事件の祟りで後二条殿が薨じた経緯が記され、後半部では、禰宜を傷付けた罪には、仁源座主も手の施しようがなかったことが、具体的に描き出されている。

次に、『天台座主記』は、同じ事件を、

嘉保二年乙十月廿四日奉振上日吉神輿於中堂　是爲訴申美濃守源義綱殺害中堂久住者圓應事　所司社司等參洛之間　於河原爲賴治被射傷之故也（神輿振登山初度無裁許後年不吉）

と記している。『天台座主記』の場合は、事件への抗議の為に神輿を振り上げた最初の例ということに、特に力を置いているようだ。先の『愚管抄』の記事と比べると、大衆が朝廷に訴えようとした理由が、義綱が円応を殺害した為だと具体的に記されている反面、弓矢で損傷された部分は抽象的になり、その代わりに、「於河原爲賴治」と下手人に対する記述が詳しくなっている。又、『愚管抄』はこのような処置を行った後二条殿への神罰を焦点に事件を記していたが、『天台座主記』には後二条殿は登場せず、寧ろ「無裁許　後年不吉」と朝廷を相手としている風である。

二

「平家物語」諸本の、この「願立」説話の取り組みには大きな特徴がある。それは、安元三年の「御こしふり」事件との関連で、この説話が取り組まれているということである。（注八）その、当初の関連は、具体的にはどのようなものだったのであろうか。

「平家物語」諸本の中で最も素朴な「願立」説話の姿を伝えているのは『源平闘諍録』（以下、『　』を付けない）であると考える。筆者が素朴と考えたのは、第一節に記した『天台座主記』『愚管抄』的関心（記述）の外に、余り多くを語っていないことからである。

源平闘諍録の記事は、『愚管抄』と同じく朝廷に訴えようとした「日吉社司延暦寺寺官」を武力で退けようと計った後二条関白が「山王御尤」を受けて早死にしたということを趣旨としているが、材料は寧ろ『天台座主記』に共通するものが多い。但し、共通する部分も、記事は全体的に源平闘諍録が具体的で、詳しい。『天台座主記』に全く記されていないことは、事件の後、僧綱達が事情を奏聞しようと下洛を企てたが、入れられなかったこと、後二条関白が大衆の咒咀の為に重病に罹ったこと、そして、そこ以下の、

被立品々ノ御願ヲ　雖被申様々ノ怠タリヲ　言スニ御年三十八ト　康和元年庚子六月廿八日　先立父大殿ニ師実公　京極殿終ニ失ケル　武御心モ頸ヲ道理御坐ケレ共　真ニ成ル事ノ急時　惜ヲ御壽ヲ　誠ニ可惜　未タ満四十タニモ

先立父ノ大殿ニ事ニ口惜カリシ事也　取時者淺猿事共乎　然則於テハ古今ニ　山門ニ訴訟恐事ナリト申傳タリ　老少不定ノ境　可先立老タル親ヲ云事不定　随生前宿業ニ之習ナレ　万徳果満ノ世尊モ　十地究

竟ノ大士達モ　不及力御事ニテ　慈悲具足ノ山王モ　無惜降伏ヲ乎
和光利物方便ナレハ　折節尤給　乍モ理恨ツク淺猿事也

の罹病後、この説話末までの部分である。

源平闘諍録のこの説話の後半部分（引用部）の特色は、後二条関白と山王、この二者だけの問題として述べていることにある。「立品々ノ御願ヲ」「申様々ノ怠タリヲ」のは、後二条関白が「真ニ成ツ事ノ急時惜ヲ御壽ヲ」というのだから、彼自身の行為と見るべきであろう。後述のように、源平闘諍録以外の「平家物語」は子の為に何事も厭わぬ母親を描き出して、「山王御尤」に対照させる。源平闘諍録が母親を全く登場させないのは筆者には古い形と見える。又、「平家物語」のこの説話の展開に関わることで注目される点は、事件の発端の年月日と後二条関白の薨じた年月日を記すが、その間の長さに全く関心を示していないことである。このことも筆者には、説話が展開して行く前の古い形と思われる。

右のように「平家物語」諸本の中で最も古い姿の「願立」説話を伝えていると見られる源平闘諍録は、(注七)この説話を「御こしふり」事件にどう関連付けているであろうか。

安元三年の「御こしふり」事件は『愚管抄』には、それとして記されていない。そこで、『天台座主記』によってこの事件を眺めてみると、甚だ「願立」説話事件に似ていることに気付く。事は、師高、師恒兄弟と白山との間で起こった。末寺である白山を支援する為、比叡山の大衆が日吉の神輿を連ねて朝廷に訴えようとすると、それを阻止しようとする武士との間で戦闘が起こる。神人、宮司に死傷者が出、十禅師の神輿にも矢が立つという有様であった。比叡山では、これに抗議して、大宮以下の神輿を根本中堂に振り上げた。三日後、師高がやっと流罪に処せられ、神輿を射た者も禁獄せられた。事件はこれで終わるかと思えたが、五月に入ると、天台座主が罪を問われ、流罪に処せられた。比叡山では、これに抗議して、再び神輿が振り上げられた。その後、比叡山側は実力行使に出て、配流途上の座主を奪い取ってしまった。このような混乱が続いているうち、六月一日、事件が発生して、権大納言成親が流罪に処せられ、西光、師高父子は処刑されるということになって、やっと一連の事件は治まっている（『愚管抄』は、これに対して、六月一日の事件を所謂鹿谷の陰謀の露顕という筋で描いている）。

今、源平闘諍録の「願立」説話の取り組み方を見ると、山門の大衆が蜂起して師高・師恒兄弟の処罰を訴え出たのに、上皇の裁断がなかなか下りない、そういう状況を受けて、この説話は提示されている。又、この説話とその前の表現を見ると、裁断が遅いことに対して、「山門ノ訴訟ハ自昔異他」といって太政大臣以下が憂えていたことが記され、一方、説話の中にも「於テハ古今ニ山門ノ訴訟恐事ナリト申傳タリ」という類似の表現が見出される。このような点から、源平闘諍録の「願立」説話は、山門の訴訟は速やかに聴き入れる外ないものであるのに、それを強硬に拒んでいる、といった院庁の姿勢を浮き彫りにする為に、先ず取り入れられたと考えられる。

「願立」説話の、これ以前の文脈から考えられる役割（関連）は右に述べたようなことであるが、「願立」説話そのものには、実は裁断が延びのびになったというようなことはない。山門の訴訟に対して後二条関白が武断的な対応に出、忽ち事件となっているのである。さて、安元三年の「御こしふり」事件は、源平闘諍録では、この「願立」説話の後、間もなく、平重盛の郎等によって矢が放たれ、

神人・宮司に死傷者が出るという、「願立」説話さながらの展開となっている。この展開から見ると、「願立」説話は、先述の役割の一方で、「御こしふり」事件の展開の下染めの役をも果たしていると考えられる。

さて、「願立」説話が一方で安元三年の「御こしふり」事件の下染めをしているということになると、ここに一つ問題がある。それは、この説話が武断的な処置に出た後二条関白に神罰が下るということを趣旨としていたことである。「御こしふり」事件で御二条関白に相当する人物は誰であろうか。源平闘諍録では、上皇の裁断が遅れるのを太政大臣以下が嘆いたとあるし、関白基房は全く顔を出していない。とすれば、後白河法皇その人かということになるが、法皇が直接目されているとも見えない。ところで、源平闘諍録を見ると、「御こしふり」事件は、法皇側近の北面の武士の「驕勇」を指摘した一段から始まっていた。そして、その北面の中心に据えられていたのが、師高の父の西光と西景である。このような流れから見て、筆者は、「御こしふり」事件で後二条関白に相当するのは院司、特に西光なのではないかと考える。「願立」説話以外には「山王御尤」という表現は全く出て来ないが、これは二転三転するこの事件の経緯と、『天台座主記』の「御こしふり」事件と『愚管抄』の「鹿谷」の陰謀を綯い合わせて源平闘諍録のこのあたりが纏められたこととに因るのではないか、と思われる。

三

源平闘諍録に次いで素朴な形をしているのは、屋代本『平家物語』（以下屋代本と略称する）と四部合戦状本『平家物語』（以下四部合戦状本と略称する）である。

屋代本と四部合戦状本には、後二条関白の親が病気の平癒の為に祈願するところが出て来る。これは源平闘諍録には出て来ない場面である。

筆者は屋代本と四部合戦状本を源平闘諍録に次ぐ古態の「願立」説話と考えるが、親の祈願によって、屋代本は「暫シハ御平癒ト聞ヘサセ給シ」とするのに対し、四部合戦状本では十禅師権現が「何祈リ申不可助カル」と宣告し、関白はそのまま薨ずることになっている。これは矛盾としか言いようがないが、しかし、この矛盾は前節で述べたように後二条関白の発病に日付をせず、「願立」事件の始まりの年月日と関白の薨じた年月日だけをこれらの「平家物語」が記していたので、その間の長さから両説が生じたものと考えられる。「暫シハ御平癒」とする屋代本などは、他の資料を参照することなく、源平闘諍録や屋代本に書かれている程度の材料だけで解釈したのに違いない。

さて、屋代本の「願立」説話は、その大半が前節に記した源平闘諍録に一致する。源平闘諍録にあって屋代本にないのは、前節で注目した「取時者淺猿事共乎　然則於ヲハ古今ニ山門ノ訴訟恐事ナリト申傳タリ」の表現だけである。一方、屋代本にあって源平闘諍録にないのは、「御母北ノ政所是ヲ御歎キアテ祈申サセ給シカハ暫シハ御平癒ト聞ヘサセ給シ」という先述の指摘を含む部分と、忠胤法印の法力の恐ろしさを述べた部分、

大般若畢テ後　結願導師ニハ忠胤法印　末忠胤供奉ト申ケルカ
高座ニ登テ表白　金打鳴シ　理ヲ非ニ成テ　我等ニ讎ヲ成給

フ関白殿ニ　鏑矢一ツ放當テ給ヘ　大八王子権現　ト高ラカニソ被申ケル　即其夜　八王子ノ御殿ヨリ鏑ノ音イテ、　王城ヲ指テ行　トソ大衆ノ夢ニハ見タリケル　其朝　関白殿南殿ノ御格子ヲ被開ケルニ　思モヨラヌ樒ノ花ノ一房　御簾ニ立タリケルソ不思議ナル

の二箇所だけである。

最初の源平闘諍録にあって屋代本にない表現だが、前節で記したように「山門ノ訴訟ハ異他ニ事也」という表現が、この「願立」説話の前にあるので、同じ文が説話の中になくても何の差し支えもなかろう。屋代本にあって源平闘諍録にない部分の前者については、先にその意義を解説して置いたが、屋代本のこの部分の特徴は、母北の政所の祈願の内容が全く具体化されていないことにある。従って、屋代本の場合、山王は子を思う母の情に感動して、暫く後二条関白の命を延ばしてやったということになる。祈願の内容が具体的に示されないことを、筆者は源平闘諍録に次ぐ古態を示す点と考える。後者の、忠胤法印が八王子権現に祈願して、霊異が生じたという譚は、源平闘諍録、四部合戦状本を除く全ての「平家物語」にある。忠胤が説法の名手であったことは知られているが、「平家物語」が何を根拠にして、この譚を取り入れたかは詳にし得ない。

四部合戦状本の「願立」説話には源平闘諍録にある内容が全て含まれている。但し、「被立品々ノ御願ヲ　雖被申様々ノ怠タリヲ」の部分は、「大殿北ノ政所」の祈願を具体化した長文の譚となっている。一方、四部合戦状本にあって源平闘諍録に全くないものは、この説話の末尾にある、後二条関白の体の脹れが、父大殿の春日大明神への祈願で引いたという譚と、白河上皇の崩御も山王七社権現の咎めと考えられるということとである。「大殿北ノ政所」の祈願の構造については、山下宏明氏に、

ⓐ母親（ママ）がひそかに日吉の十禅師に参籠し、願立をするが、その内容を語り手が第三者の立場から語る形をとる。そしてその願の内容は、

（i）衆徒のために八王子の御前から十禅師の御前まで廻廊を造る。

（ii）衆徒のために冬小袖を布施する。

（iii）一期の間、宮仕えする。

の三か条（Ⓐとする）である。

しかしこれらは母が心の中に祈念したものであるため、本来、その内容はわからないはずだ。それを明かすために、

ⓑ羽黒の童神子に十禅師が神かかりして母の心中を語り明かすことになるのであるが、その内容は、

御心中に三の御願有りとて、彼の御意趣一つも違へず一々に之を申す、

とあり、その内容は上掲の、語り手の語ったところに譲って、ここに再述することをしない。

という分析がある。（注八）猶、右に記した部分に続けて、十禅師権現は、親子の恩愛の深さを哀れみながらも、後二条関白が衆徒に与えた嘆き、苦しみは全て自分の身が受けることになったと言って、童神子の脇の下の大きな傷を見せる、そして、もはやどうすることも出来ないと言って、権現は上がってしまう、母北政所も、それで、仕方なく下向した、ということが付いている。四部合戦状本のものは、源平闘諍録と同じく祈願も空しかったという趣旨である。「大殿北ノ

政所」が祈願したということは、先述のように屋代本にもある。但し、屋代本の母北政所はどこで祈願したのか明らかでないが、四部合戦状本は十禅師に参籠してとなっている。後述の『日吉山王利生記』には十禅師権現が下って神意を告げる説話が相当収められているので、四部合戦状本の十禅師参籠は、そのような十禅師信仰の高まりに基づく設定かと思われる。猶、後述の非当道系諸本は全て、参籠先を十禅師としていると見られる。「大殿北〻政所」の祈願の内容が三つ具体的に示されているが、この三つの祈願という形式は、延慶本『平家物語』（以下、延慶本と略称する）、長門本『平家物語』（以下、長門本と略称する）を除く、残りの「平家物語」の全てに何らかの形で出て来るものとなっている。又、具体的に祈願の内容を挙げる以下の「平家物語」は全て法華講に言及するが、この四部合戦状本にはそれがない。筆者は、この点から、四部合戦状本のこの説話は法華講宣伝に使われる以前の姿を伝えているのに違いないと考えている。

四部合戦状本にあって源平闘諍録にないものの前者は、日吉山王の怒りは春日大明神も抑えることは出来ないということを、一方で示していると見られるので、「山王御科〻」の恐ろしさを神の力関係から補足する譚となっている。この譚は、外には長門本と『源平盛衰記』（以下、『　』を付けない）に見られる。源平闘諍録にないものの後者は「山王御科〻」の対象者の拡大傾向を示すものとなっている。四部合戦状本が、しかし、白河上皇の崩御を「山王御科〻」と判断したのは、「七年」「七月七日」「七社権現」の「七」という数字の符合からであろうと思われる。とすれば、この四部合戦状本の拡大傾向は、第二節で記した安元三年の「御こしふり」事件における「山王御科〻」の暗示という枠を破って、「願立」説話の中だけで解釈された結果生じたものと認められる。これは、一旦「平家物語」の筋に結び付けられることによって取り組まれた「願立」説話が、「平家物語」の中で、逆に、筋から独立した動きを始めたことを物語っている。この「平家物語」の筋からの自立は、屋代本・四部合戦状本の「願立」説話の後に重盛が内大臣に、師長が太政大臣に任じられるという、「御こしふり」事件とは直接関係のない記事が配されたこととも深く関わっていよう。

四

『日吉山王利生記』にも周知のように「願立」説話が収められている。『日吉山王利生記』の本説話は、勿論日吉山王の利生説話の一つとして纏められたもので、当然のことながら「平家物語」の筋との関わりはない（但し、成立については後記のことが考えられる）。

『日吉山王利生記』の説話で注目されることは、後二条関白の発病の年月日を記すことである。これは先述のように、源平闘諍録、屋代本、四部合戦状本にはなかった。『日吉山王利生記』のものは、ここを始めとして、日時を明らかにする方法を採って、迫真性を保とうとしたと見られる。確かに、日並み記を畳みかけることによって発病から薨去までの急迫する情況は描き出せたように思うが、その一方で、後二条関白の咒咀が中二年も経って働いたというのは、随分間延びしているという気がする。

その咒咀の場面だが、『日吉山王利生記』では、矢で傷ついた禰宜を八王子の拝殿に入れて、静信定額が導師となって取り行なったこ

とになっている。この禰宜を八王子の拝殿に入れたことや静信定額が中心になって咒咀したことは、次節で述べる延慶本と深い関わりをもつものと考えられる。

「山王の御祟」を受けた後二条関白方の祈願は、屋代本と同じく当人が様々なことを行うが効験がないので、母北政所が更に願を立てるという展開になっている。しかし、屋代本のものは母北政所の祈りの御蔭で「暫シハ御平癒ト聞ヘサセ給」たというのだが、『日吉山王利生記』のものでは、三つの願の中に法華問答講が含まれるにも拘らず、後二条関白に今生で効果を齎すことはなかった。

さて、後二条関白の「おこたり申させ給こと」は、次のように日を追って畳み掛けられていた。

同廿三日一□手半薬師如來像　延命菩薩像各一百躰　又等身の薬師一躰をぞつくり供養せられける　又日吉にして千僧供養あり　廿六日よりは　同社壇にて十ケ日の間　千僧の仁王講をおこなはる　同日より一切經幷金泥法華經を供養せらる　御導師は澄禪僧都也　又廿七日よりは　中堂にして千僧の藥師經轉讀あり　然而廿八日の夜半より御心地いよ〳〵おもく成せ給ければ　驊騮騄駬の類　金銀幣帛の□諸社におくられけり　あまさへ二帋の願書をあそばされて　天台座主仁覺僧正にぞたてまつられける　重又丈六藥師七軀　阿彌陀如來一躰つくり始られけり

これらのうち、一□手半薬師如来像百体、等身の薬師一体、阿彌陀如来、仁王講のことは後述の延慶本にも出て来る（日次記の形を取らずに）。しかし、一切経並びに金泥法華経の供養、驊騮騄駬の類や金銀幣帛を布施としたこと、「二帋の願書」のことは延慶本には、全く見えない。猶、最後の願書を天台座主に送ったということは、『愚管抄』の仁源座主の祈りと何らかの関わりがありそうに見えるが、詳にし得ない。

母北政所の祈願の特色の一つは後二条関白の病床の傍らで行われているらしいことである。このことは、後二条関白の背中から先年の矢が当たった時の血を出して見せたということから想定される。猶、この「先年血出して見せん」というのも『愚管抄』のものと何らかの関わりがありそうである。『日吉山王利生記』の説話は『愚管抄』のものが訛った果てに纏められたものでもあろうか。祈願の特色の二つ目は、三つの祈願とも八王子に捧げられていて、十禅師という名が全く見えないことである。これはこの「願立」説話全体についての特色で、『日吉山王利生記』はこの説話を記中唯一の八王子権現の利生記として纏めたと見られる。

母北政所の三つの祈願の中で納受されたのは法華問答講だけであった。次節で取り上げる延慶本以下の「平家物語」にも、全てこの法華講が出て来る。日吉山王の心に叶うものとしての法華講の宣揚は、『日吉山王利生記』や延慶本以下の「平家物語」の段階で、この「願立」説話に取り組まれたと考えられる。

しかし、『日吉山王利生記』で描かれる法華問答講の利益は、八王子権現によって厳の苦を与えられた後二条関白の魂を「長日」の後にやっと解放する程度でしかない。このことで描き出されたのは「山王の御祟」の恐ろしさである。『日吉山王利生記』は「山王の御祟」の恐ろしさを描き出すという方向で纏められたものであろう。

四部合戦状本では先述のように「山王御科〻」の対象が拡大する傾向が認められたが、『日吉山王利生記』のものでも、別方向に更に拡

大している。別方向にというのは、四部合戦状本の場合は後二条関白より上位の白河上皇に拡大していたのに対して、後二条関白より下位の者に拡大しているということである。即ち、中宮太夫師忠、義濃守義綱、中務丞頼治という関係者全員が「山王の御祟」で滅ぶことになっている。『日吉山王利生記』で注目されることの一つは、これらのうち、中宮太夫師忠に対して、特に「關白殿中宮太夫師忠卿の申狀につきて」・「師忠卿あしざまに申なすは（ママ）　神明の恥辱に及べしや」と批判が集中していることである。これは、「平家物語」における院司、特に西光の位置が改めて意識されたものかと考えられる。しかし、中宮太夫師忠が強調されて来ると、「山王の御祟」が集中する後二条関白が哀れにも見えてくる。後二条関白の何らかの救いと、関係者全員の滅亡とは、このような事情から要請された面もあろう。猶、関係者全員の滅亡のもつ問題点については次節に記したい。

五

延慶本と源平盛衰記の「願立」説話は、「平家物語」諸本の中で特に、前節に記した『日吉山王利生記』のそれと深い関わりをもっている。しかし、その関わりの様相は、以下のように両本で相当に異なる。

まず師忠に対する批判は、両本それぞれに『日吉山王利生記』に近いものを記す。しかし、源平盛衰記の権中納言匡房の批判は「師忠あしさまに取申さすは関白御憤あらむや　関白頼治に下知し給はすは神明御恥に及給ふへしや」と、後二条関白にも師忠と同程度の過失があったことを忘れてはいない。

右のことと深く関わるのが、前節で記した「山王ノ御トカメ」の対象者の拡大ということである。延慶本は「彼義綱モ程ナク自害シテ一類皆滅ケリ　師忠モ程無ク失ニケリ」と、事件を起こした義綱と、「神明ノ恥辱ニ及」ぶ具申を行った師忠の二人に拡大し、源平盛衰記は同じく二人ながら、「あしさまに申すゝめまいらせたりける中宮大夫師忠もいく程もなくしてうせにけり　禰宜友実をいたりける中務烝（ママ）頼治自害して一類も皆ほひろけり」と、師忠と下手人の頼治とするのである。但し、表現を見ると、延慶本の義綱のそれと源平盛衰記の頼治のそれとは非常に近く、一方が他方の表現を借りた可能性が高い。先述のように『日吉山王利生記』では、右に名前の出て来た三名全員が「山王の御祟」を受けることになっていた。三名全員とする『日吉山王利生記』と二名とする延慶本、源平盛衰記ではどれを古態と考えるべきであろうか。筆者は次の理由で、延慶本の師忠、義綱を古態と考えたい。というのは、「平家物語」、「御こしふり」事件に対応させる時、重盛に相当する頼治に「山王ノ御トカメ」が及ぶとするのは、甚だ都合が宜しくないと考えるからである。四部合戦状本の対象者の拡大に触発されて、延慶本が「御こしふり」事件に対応する師忠、義綱に対象を拡大した、『日吉山王利生記』は、「平家物語」の筋と直接関係することがないので、それを関係者全員としてしまった、というのが拡大の流れではあるまいか。

次に、八王子での呪咀の件に移ろう。延慶本は禰宜の名前を友実と記し、且つ八王子の禰宜であったとする。友実という名前は『愚管抄』に出ていた。一方、その所属が何に拠ったかは詳にし得ない。しかし、彼が八王子の禰宜であったならば、彼を八王子の拝殿に舁

ぎ入れるのも尤もだ。『日吉山王利生記』などが禰宜を八王子に入れたとするのは、この延慶本のような記述が前提となっているのではなかろうか。源平盛衰記も延慶本と同様に禰宜の名前を記すが、その所属については『日吉山王利生記』と同じく記さない。又、源平盛衰記では、忠胤の「教化の詞」の後で、友実を拝殿に昇入れて、社官、神女等が呪詛したとする。これに対して、延慶本は、『日吉山王利生記』と同様に禰宜を拝殿に入れて、静信、定学が「教化詞」で呪詛したとしている。延慶本は、『日吉山王利生記』の「定額」を人名にしてしまっているが、「教化詞」は『日吉山王利生記』よりも詳しい。猶、延慶本は、その「教化詞」に重ねて、「申上ノ導師ハ忠胤僧都トシ聞エシ」と、源平盛衰記や覚一本『平家物語』（以下、覚一本と略称する）等の記す忠胤の名前をも付け加えている。

もう一つ、後二条関白が発病してからの対応などを見てみよう。延慶本では『日吉山王利生記』と異なり、直ぐ母北政所が参籠して、祈願を立てることになっている。しかし、その祈願は「顕ハレテノ御祈」と心中の立願との二本立てになっていて、二本立てという姿はいくらか『日吉山王利生記』にも通っている（主催者、時間の面で大きく異なるが）。「願ハレテノ御祈」として記されている内容は、前節に記したような具合で一部『日吉山王利生記』に一致するが、それに、源平盛衰記が座主への願書の内容とする「百番ノ芝田楽百番ノ一ツ物競馬矢鏑馬相撲各百番」が混じえられている。心中の立願は五つを数える（三つという型が見えないのは、この延慶本と長門本だけである）が、その中には『日吉山王利生記』と同じく法華問答講が含まれている。但し、延慶本の場合は、この法華問答講によって三年間の延命が許されることになっている。この法華問答講による三年の延命は、覚一本や源平盛衰記など、残りの「平家物語」諸本に共通するものであるが、これは第三節に記した屋代本の型の発展したものと考える。

源平盛衰記では、発病して直ぐは父大殿と母北政所がその場で祈りを始めるが、効果がないので、母北政所が参籠して三つの願を立てるという成り行きになっている。この点は、殆ど『日吉山王利生記』に一致するが、直後の祈祷を両親が始めるとする点は、第三節に記した四部合戦状本に通じる。大殿と母北政所の祈りは、日分けされていないのが異なるだけで、内容は『日吉山王利生記』と完全に一致する。二紙の願書は、源平盛衰記では父大殿が送ったことになって居り、その内容は、先述のように延慶本（覚一本などにも）にあって、『日吉山王利生記』にないものが中心になっている。母北政所の三つの願には法華問答講は含まれていない。それで、結局、十禅師権現は助けることは出来ないと言って、上がりかける。この間の十禅師権現の言葉なども四部合戦状本に近い（猶、四部合戦状本に近いものとしては、以上の二つの外に、後二条関白の体の脹れの問題もある）。さて、ところで、十禅師権現が上がりかけたところで、源平盛衰記では母北政所が法華講を立願し、それで三年間寿命を延ばして貰うことになっている（同時に、『日吉山王利生記』と同様に、巌の苦しみからも解放されることになっている）。これは、山下氏も指摘されている[注一〇]ように南都本『平家物語』（以下、南都本と略称する）と共通する。これらは、法華講による延命が他本（覚一本などの語り本が最初かと思われる）で語られるようになってから、それを強調するべく「付加」という形で取り入れたものではなかろうか。

右に記して来たように、延慶本も源平盛衰記も「平家物語」と『日吉山王利生記』の類を編著して成ったものと考えられる。しかし、この二本が関わった『日吉山王利生記』の類は、右に記して来たように、延慶本のものはそれの兄に相当する資料かとみられるのに対して、源平盛衰記のものは現『日吉山王利生記』そのものという違いがあると考える。

六

屋代本以外の当道系諸本のものは、中院本『平家物語』（以下、中院本と略称する）等のものと覚一本を始めとするものとに大きく分けられる。

中院本等のものは、屋代本の説話の流れと完全に一致する。勿論、各場面が具体化し、詳しくなって行っているのであるが、その主な違いは、忠胤の詞に「なたねの二葉より」云々の文が入っていること、「様々ノ御願ヲ立ヲコタリヲ申サセ給」のところが第五節に記した延慶本の「顕ハレテノ御祈」と同じものに具体化されていること、母北政所の「祈申サセ給」ことが『日吉山王利生記』と同じ三つのものに具体化されていること、「暫シハ御平癒」のところが法華問答講の御蔭で三年間の延命を得るということになっていること、等である。

これに対して、覚一本等のものは、後二条関白が「山王の御とがめ」を受けたところから、中院本等のものを離れ、前節に記した延慶本と同じく母北政所の祈願となる。以下、心中の祈願部分――中院本等と同じく『日吉山王利生記』の挙げる三つを記す――を除いて、句末まで表現上も延慶本に極めて近い。

中院本等にしても、覚一本等にしても「山王の御とがめ」に対する祈願の内容を具体化し、法華問答講によって三年の延命を得たとする点では全く同じである。異なるのは、中院本等が屋代本の展開を忠実に守っているのに対して、覚一本等が延慶本的展開、表現を取っていることだけである。この中院本等と覚一本等との新古の問題について、筆者は、屋代本のものとは次元を異にする内容になったことから、覚一本等のものを革新的平家として最初に登場したものではないかと見做したい。

その覚一本等のものと延慶本並びに『日吉山王利生記』のものとの新古の問題であるが、筆者は、覚一本的説話内容の発生を現存延慶本や『日吉山王利生記』より前と考えたい。覚一本的説話内容が語り出されたことに触発されて、延慶本の編著作業が始まったのではなかろうか。

猶、中院本等のもの、覚一本等のものに共通して注目されることは、後二条関白に法に任せて事を処するよう具申した師忠に全く言及することがなく、従って、「山王の御とがめ」の対象者も後二条関白以外に拡大していないことである。これは、琵琶法師の語りが対象の拡散を煩わしく感じたからに違いない（筆者は、四部合戦状本が契機になって延慶本の二人が先ず起こったと考えている）。

このように考えて来ると、第三節に記した屋代本と四部合戦状本の段階で、当道系諸本と非当道系諸本とは分かれ、その後、互いに影響関係をもちながらも、別々のものとして展開して行ったように見える。[注三]

七

南都本のこの説話の冒頭部から母北政所の参籠までの部分は屋代本のそれが使われていると考えられる。この間で最も目につく相違点は、仲胤の啓白の詞に「我等菜種二葉ヨリ生立給ヘル神達」の表現を加え、引いていることである。母北政所の祈願の内容は四部合戦状本のものに一致するが、山下氏も指摘されているように、(注三)童神子がそれを再度繰り返しながら、願いを拒否して行く。ところが、驚くべきことに、その最後に到って、「必至定業限アリ　中ニモ法花問答講余ニアラマホシク思食間　三年カ分ヲハ延テ奉ルヘシ」と、母北政所の祈願していなかった法花問答講が突然出て来て、三年間の延命が許されることになっている。これは、南都本が何れかの法華問答講を引いて、第五節で扱った源平盛衰記のような付加型の延命譚を作ろうとしていたことを物語っている。このように、南都本の本説話は、屋代本、四部合戦状本、それに法華問答講による延命を記す一本の編著本と見られるが、完成度が低く、草稿段階のものかと見做される。

最後に長門本のものに目を通したい。

長門本のものの冒頭部から神輿が振り上げられるところまでは四部合戦状本と同じ表現である。長門本と四部合戦状本の共通する点は、この外に、北政所が十禅師に参籠して祈願すること、後二条関白の体の脹れの問題などがある。右の北政所の参籠の前、長門本は「平家物語」諸本で唯一、仁源座主が後二条関白の為に祈ったことを記している。第一節で記したように、このことは『愚管抄』にあったもので、長門本は『愚管抄』を参考にしたとみられる。長門本が参考にしているのには、その他『日吉山王利生記』もある。『日吉山王利生記』からは法華八講の御蔭で巌石の苦しみから解放されるという筋が取り入れられている。長門本の本説話は、右のように四部合戦状本に『愚管抄』や『日吉山王利生記』といった資料の記事を取り合わせたものだが、母北政所の祈願八つのうち五つしか童神子が挙げないという不整合もある。性質は対照的だが、南都本と長門本の「願立」は、説話未整理の目に付く編著本という点では相当に似ている。

八

筆者は、「願立」説話の構造、展開などを以上のように考える。筆者が、その過程で重視したことは、息子の為に祈願する女親を描いて読者にその懸命の行為を伝えようとしたことや、法華問答講の利益を宣伝すること等は、一度そうしたことが始まると、とてもそれを省いて元の描写で済ますということは出来ないのではないかということであった。又、後二条関白の病いが一度治ったのか否か、山王の祟りの「御こしふり」事件との関わりについては、私見を加えてみた。これらのことについて、御意見を待つものである。

(注一)『愛知県立大学十周年記念論集』昭和五〇年一二月。
(注二)『軍記と語り物』昭和五六年三月。
(注三)『国語国文研究』昭和五六年七月。
(注四)『日本文芸研究』昭和五七年九月。

（注五）『名古屋学院大学論集』昭和五九年
（注六）勿論、その関連のあり方は以下のように諸本で異なる点がある。
（注七）注二の論文で、山下氏が、源平闘諍録の説話を「基本構造」のみのものと見、最古態と位置付けられている。
（注八）注二の論文中。
（注九）猶、源平盛衰記は「平家物語」諸本中唯一つ、祟りによる発病の年月日を記す。
（注一〇）注二の論文。
（注一一）屋代本を除く当道系諸本が、母北政所の参籠先を八王子とするのも、このような事情だろう（勿論、場所を統一した方が効果的ということからだろうが）。
（注一二）注二の論文。

本稿は、平成七年度九州大学国語国文学会（六月四日）で口頭発表した資料を基にしながら、纏め直したものである。